



かめい かつゆき
亀井 克之氏

【プロフィール】
90年(平成2) 大阪外大大学院修士課程フランス語学専攻修了、93年関大大学院商学研究科博士課程後期単位取得、94年同大総合情報学部専任講師、97年同助教、現在に至る。

「フランスの自動車産業でまず最初にフジョーを取り上げたのはなぜですか。」

「万年3位メーカーという印象があるが、実はフジョーはフランス一の自動車会社になった時期もある。フランスは左がかった学者が多くて、国営企業のルノーを研究することが多かった。そこで、私はフジョーを研究した。」

「フジョーを歴史的に見て、そ

著者 登場

フランス企業の経営戦略とリスクマネジメント

(法律文化社刊、075・791・7131)

創業家の経営介入に問題

その結果、87年に日本車の台頭でじり貧になった米国市場から撤退、つまりAMCを手放してしまっただけで、昨年の米国でのフランス車はたった8台の輸入実績だった。」

「ルノーとニッサンの事件はどう見えますか。」
「93年ボルボとの合併が壊れたルノーには3度目の正直。これで国際化、すなわちアジア市場の開拓とニッサンの優れた技術を手にする。くしくもAMCの失敗から20年、ルノーの野望が再燃する。いずれ本を書きたい。」

「電気自動車にも触れています。が、ニッカドではだめですか。」

「失敗のケースとして書いた。電力が豊富だから産官学あげて取り組み、とくにフジョーが熱心だった。普及台数は世界一だが、大きな投資をしたものの発電に化石エネルギーを使えば環境には同じではないかと見抜かれて色あせた。また燃料電池開発に乗り出せば、また後塵を拝している。」

「ミシュランは、フランス企業は国際性がないとよくいわれますが。」

「ミシュランでも、フジョーでも経営の重要問題に創業家がタッチしてくるのが問題。米国のテレビ劇で刑事コロンボがあるが、彼の車がおんぼろのフジョー。米国から見ればフランスはおんぼろという皮肉なたとえのように見える。」

(大阪・編集委員・兼子 次生)

の教訓は。

「78年、クライスラーが欧州企業を手放すときにフジョーがそれを買収して欧州一になったことがあった。しかしその時、英国会社のモラルの低さとか、生産性の低さなどの負の遺産を引き継いだ結果、80年に赤字転落、拡大路線が所期の目的を果たせなかったわけだ。」

「ルノーがニッサンに出資したが、ルノーの栄枯盛衰も面白いですね。」

「ルノーは20年前の79年、AM

C(アメリカン・モーターズの株式を取得、実質的に子会社化した。ルノーの重種アライアンスが米カー・オブ・ザ・イヤーを売るなど大成功した)」

「社会主義の中でフランス産業は競争力を失った。」

「81年、ミッテランが大統領に当選、社会主義化の政策を打ち出し、バラ色の夢を描いた。次々と大企業を国営化し、ルノーをその象徴的存在として宣伝材料に使ったが、とくにルノーは赤字化、ますます、親方三色旗の傾向を強め、